

特集

貝塚市立東青少年会館の取り組み状況

東青少年会館 職員集団

一 はじめに

貝塚市東地区（以下、「地区」と呼ぶ）の教育改革の取り組みと、その中で明らかに becoming している課題をまとめてみたい。

地区では、部落解放同盟大阪府連「第三期解放運動の創造」（一九八三年）で提起された教育改革の提言を受け、支部教育対策部のもと出身保母や教師、指導員などが中心となって、子どもの実態や家庭の教育力に目を向け、地道な取り組みが進められていた。具体的には、「むらの子育て」（ハンドブック）の作成や教育研究会・子育てのつどいの開催など、子育てを見直そうという動きがすでに動き始めていた。

このような中で、「教育改革推進委員会」（一九九一年）

が設置され、本格的な教育改革の動きへと発展してきた。地区の子どもたちの実態分析から始まり、学校や家庭、地域、青少年会館や保育所の課題が明らかにされ、それぞれの部署へと問題提起がなされたのが一九九三年であった。

青少年会館としての受けとめ

青少年会館としては、今回の教育改革を大きく次の二点にあるととらえ、今後のあり方を検討してきた。

1 特別措置としての同和対策の終わりが近づき、一般対策への移行が進むことを念頭に置いた、青少年会館のあり方が問われている。

この間の解放運動によって生み出されてきている教育環境を、光（成果）と影（課題）の両面からとらえ直し、主体の移行や課題の克服の方向を明らかにする

ことが求められていると受けとめる。

貝塚地区における光は、①高友・大友・青年部活動を担うという人材が育ち、その道筋が確立された②子どもたちの「荒れ」をほぼ克服できた③高校進学率も府下平均に近づいたなど、青少年会館創設当時に比べると、多くの成果面を挙げることができた。

一方、影の部分としては、①子どもたちの育ちが画一化し、個性を開花させられなかった②高校進学率は上がったが、依然として低学力の課題を残した③親たちの間に、学校や青少年会館、保育所依存の意識を作ってしまったなど、課題も山積していた。

2 国際化や情報化、学校週五日制、生涯学習体系への移行など、社会の変化に応じた青少年会館のあり方が問われている。

これまでは、同和地区青少年の育成に、主眼をおいた取り組みを展開してきたが、周辺地域との連帯や国際的視野にたつた取り組みが求められてくるものと思われる。また、学校週五日制の実施は、家庭や地域の教育力に問題を投げかけており、学校と社会教育施設・地域・家庭がそれぞれに持ち味を発揮して、協同の教育を進めていく生涯学習時代が到来してきているものと受けとめる。

できた。この時の青年たちが、現在の支部の中枢を担って活躍している。

解放子ども会二〇周年を機会に、これらの歴史を掘り起こし、子ども会を地区主導へと移行していく道筋を確認してきた。支部教育対策部を中心に、ボランティア集団による子ども会運営の構想がまとまり、「EYVの会」(イースト ユース ボランティア)の結成(一九九六年)が実現できた。結成当初は、ソフトボール大会などの市子連行事やキャンプ、スキーなどの地区主催行事運営を、EYVの会のメンバーが中心になって取り組んできた。しかし、これは社会同和指導員の代替でしかなく、保護者の依存意識の改善につながらないという反省に立ち、現在では保護者への働きかけを強化する方向で取り組まれるようになってきている。

また、地区の子どもたちの学力問題に着目した青年と大学生の間に、地区の子どもたちの面倒をみようという気運が高まり、しんどい子どもたちの家に入り込んで指導していく取り組みが始まった。中学三年生からスタートし(一九九六年度末)、現在は中学二・一年生まで、その対象範囲を拡大している。

専門部会の審議を発端にして、地区内の街路に「手作りの提灯」を一緒に作ろうとする動きや、「よきこいソ-

具体的には、

①子ども会を地区主導へと移行していく

②学力の課題を学校へ返す

③青少年会館を周辺に開放する

④地域の親たちの教育力向上の支援を行う
などが中心課題となり、青少年会館運営委員会内に専門部会を設置して見直し作業を進めてきた。

二 地区の良き伝統の復活を求めて

地区では、「青年が動く時ムラが変わる」という多くの歴史がある。大正時代、トラコーマが大流行した時、青年が中心となって環境の改善に取り組み、現在の診療所の前身である「トラコーマ診療所」の建設を実現してきた。託児所も古材を使って自前の建設を成し、今日の保育所へとつないできたのも青年たちであった。

敗戦後の復興が遅れる中で、子どもたちの「荒れ」にいち早く取り組み、「VYC」(ボランティア ユース カウンセラー)というボランティア組織を青年中心に作って、「あおぞら子ども会」を育ててきた。

さらに、支部結成後も青年部内に「子ども会担当」を設けて、社会同和指導員制度が敷かれるまで中心を担っ

ラン」踊りを子どもたちと一緒にやっというこうと組織作りをするなど、青年が子どもたちとの人間関係を作っというとする動きが、新しい展開を見せ始めている。

これらの動きを可能にしているのが、この間の教育運動の成果(人材が育っている)であることを教訓にしながら、青少年会館として息の長い支援活動をしていかななくてはならないと考えている。

三 生きる力を地区の全ての子どもたちに

学力保障の取り組みは、学校との連携を図りながらそのあり方を検討してきている。具体的には、週一回の連絡会議を持ち、学校や青少年会館・地区・家庭における子どもたちの情報交換や対応策を検討している。

地区の子どもたちが通う東小学校・第二中学校では、学力プロジェクトチームを編成して、授業改革を中心に取り組まれている。また、地区連携のあり方も、子育て支援の立場で家庭に入り込む動きや、子どもたちの仲間づくりの力点をおく多様な取り組みなど、地域との協同子育ての動きが数多く見受けられる。

しかし、地区の傾向として「二極現象」が見られ、教育においてもその意識の格差は広がりつつある。経済的

に安定している層では、「学習塾」「家庭教師」「私学志向」などの事例も見られるようになってきている。逆に、しんどい層では、学力も含めて放置された子どもの姿があり、いずれも新たな課題として対応策が求められる状況にある。

青少年会館としては、学力を支える資質や生きる力を育成することに重点をおいて取り組んできている。具体的には、到達感や成就感の体験、集中力や根気、夢を育む人との出会い、心の安定など、家庭や地域の教育力と密接な関係を持つ課題が多く、子育て支援としての「親子活動」を重視して取り組んできている。

例えば、「文字ばなれ」に対しては、図書事業の充実を図ってきた。月一回の読書会では、紙芝居や人形劇、ブックトークや読み聞かせなどを織り交ぜながら、参加者の拡大を図ってきた。また、篤志家の寄贈を受けて図書購入ツアーを実施するなど、子どもの視点に立った図書室運営にも心掛けてきた。結果、徐々にではあるが読書に親しむ子どもが増える傾向にある。また、これらの動きは、文字ばなれ対策にとどまらず、親子の交流や読書の楽しさを味わうという側面でも成果となつてあらわれてきている（その他の親子活動については「六 親子で…」の項で述べる）。

四 周辺地域への開放でめざすもの

青少年会館を周辺に開放することで、次の三つのことをめざして取り組んでいる。

- ① 周辺地域の参加によつて、地区の子どもが良い意味での刺激を受ける。
- ② 同和地区への予断や偏見を払拭する。
- ③ 周辺地域の同じ課題（子育て）を抱えている保護者や子どもたちと連帯していく。

周辺地域の範囲は、東地区と隣接する五小学校区（約三千名）を当面の対象として、「せいかなだより」による呼びかけを行っている。また、九七年度からは、夏季長期休業中や実施場所などに応じて、市内全域に配布するようにしている。その他、市内の小・中学校の全教職員には、全号を配布して情報提供を行っている。

現在、開放している事業内容は、学校週五日制を生かす事業（イベント中心）と講習・講座事業である。今後は、高学年や中学生を対象にした生涯学習企画支援事業も開放の方向で検討していきたいと考えている。

- △学校週五日制を生かす事業▽
- ・四月 山菜を味わう会
- ・五月 子どもまつり

また、生活体験の幅が狭いことや人間関係を作るのが苦手という地区の子どもたちの実態に立つて、青少年会館では、学年別の他に、縦割班、遊び別、男女別、ヤルマン（やる気まんまん）クラブ、社会見学、野外活動、自然体験など、多様な選択肢を企画提供している。

一方、「厳しい学力の実態」に対しては、当面の底上げの支援が求められている。この状況に対しては、先にも述べたように、地区の青年や大学生を中心に一五名が個別指導の取り組みを支援してきている。このボランティア活動では、単に学習指導をするだけでなく、次の三点を大切にして指導している。

- ① 人生の先輩として「思い」や「体験」を語り、良き相談相手としてかわり、本人の学習意欲を高める。
- ② 学習環境づくりでは、保護者への課題を提起することを念頭に置く。
- ③ 学習習慣づくりでは、学習の仕方や解決の仕方を中心に指導し、自学自習の力をつけさせることをめざす。

まだ動き始めて一年余りで、その成果を総括するには至っていないが、保護者との連携も深まり、一定の手ごたえを感じている。

- ・六月 親子で作ろう
 - ・七月 夏の森探検
 - ・八月 波止ぶり入門
 - ・九月 親子音楽鑑賞会
 - ・一〇月 親子映画の夕べ
 - ・十一月 親子サイクリング
 - ・一二月 親子劇鑑賞会
 - ・一月 バードウォッチング
 - ・二月 冬山登山
 - ・三月 国際交歓会
- △講習・講座事業▽
- 長期～硬筆
 - ・毛筆
 - ・珠算
 - ・ピアノ
 - 短期～パッチワーク
 - ・オカリナ
 - ・折り紙
 - ・プロペラ飛行機（入門・中級）
 - ・古代発見
 - ・科学工作
 - ・昆虫採集
 - ・植物採集
 - ・英会話（入門・初級・中級）
 - ・切り絵
 - ・デッサン など

単 発くろアーづくりなど随時
周辺に呼びかけて満四年を迎えるが、参加層は徐々に拡大してきており、親子による参加が増えていることが何よりも大きいと考える。九七年度の講座には一八三名の子どもと四三名の保護者が、イベント事業には千名を超える子どもと二二名の保護者が周辺から参加している。

周辺地域の参加者からの刺激

周辺地域に開放したことで、数多くの刺激を受けてきている。従来の地区の子どもたちだけでは、何かにつけて馴れ合いになり、出欠もその時次第のような雰囲気を引き締まり、真剣な受講姿勢が見られるようになってきている。また、出欠について電話で事前に連絡してくるなど、自覚の面でも変化が現れ始めている。

また、イベント行事を通しては、基本的な生活習慣の大切さや親としての子どもへのかわり方など、多くの面で学ぶことができた。

例えば、山菜を味わう会に参加した子どもを、市のマイクロバスで送迎した時のことである。バスの前方に陣取っていた地区の子どもたちが、目的地に着くと堰を切ったように降りて行った。中頃に陣取っていた周辺地域の子どもがそれに続いたが、降り際に「ありがとうございました」と運転手に声をかけて降りた。すると、後部にいた地区の子どもも同じように運転手に感謝の言葉をかけて降りたのである。

同和地区への予断と偏見を払拭するために

◆「せいいかんだより」の配布から

◆口コミで部落差別の解消に：

講師として周辺地区の保護者を登用し、その講師名をのせた「せいいかんだより」を配布した時のことである。その講師の近所の人から「あんな、こんな所に出入りしてんの？」と言われたそうだ。その講師は「最近の青少年会館は、楽しいことをいっぱいやっているよ」と答えてくれたとのことだ。

まだまだ、地区に対する差別は厳しいものがあることを思い知らされた一件であった。

青少年会館では、このような取り組みへの参加や体験を通して、また、口コミで参加者の枠を広げていくことが、結果的には、堅実で一番効果的な啓発であろうと考えている。

周辺地域の保護者との連帯

周辺地域においても子育てに深刻な課題を抱えている家庭が数多く存在している。現状では、子どもの参加や家族での単発的な参加が主で、親とつながったり、組織を作ったりする段階にまでは発展していない。青少年会館としては、子育て支援事業の中で連帯の方向を探っていききたいと考えている。

周辺地域に呼びかけた当初は、「東青少年会館は、どこにあるのですか？」という問い合わせが多く、社会性

を持っていなかったことを強く感じた。また、講座などに、一旦申し込んでいても「同和地区の青少年会館」と分かって断ってくる事例も多く、差別の壁の厚さを実感したものだ。さらに、現在の周辺地域の保護者の層が、「青少年会館へ遊びに来てもらえなかつた」子ども時代を過ごした人が多く、「私も参加していいんですか？」という問い合わせも多くあり、息の長い啓発の必要性を感じている。

◆研修・フィールドワークなどの受け入れ

研修会の講師依頼や地区フィールドワーク、交流などの依頼を、年間三〇〜四〇回程度受け入れている。講師としては、社会同和指導員を中心に地区の人材を登用している。また、フィールドワークでは、実施団体との事前打ち合わせを綿密に行い、受け身の研修にならないよう実施の仕方を工夫している。

◆青少年向け啓発パネルの作製・貸し出し

部落（東地区）の歴史、地区内施設紹介、地区の人のびとのがんばり、地区の伝承文化、子ども会の歴史、相次ぐ差別事件、沖縄問題など、課題別に約一〇〇枚を作製し、学校や関係団体への貸し出しを実施している。

五 親育て・地域育てが急務かつ最重要

青少年会館や社会同和指導員が設置され、同推校に同和配教員が配置されて、不就学がなくなり、高校進学率が上がるなどの多くの成果を見た反面、影の部分として「保護者の子育て依存」という課題を生み出してきたように思われる。

九七年度に入って、青少年会館運営委員会に二年ぶりの専門部会（六部）を設置して、今後のあり方についての審議を進めてもらっている。その審議の中で、どの部会も行き着くところが、親の意識と地域の教育力の改善の必要性である。この課題の解決こそが、今日、青少年会館に課せられている、緊急かつ最重要の責務であろうと受けとめて取り組みを強化している。

親子の信頼関係づくりをどう支援するか

スキップから生まれてくる親子の「信頼関係」づくりを、あらゆる機会をとらえて取り組む必要がある。

保護者の依存意識を変革していくために、低学年育成事業については申し込み制を実施している。申し込みの段階で、低学年事業の主旨を理解してもらい、親として

積極的にかかわるよう自覚してもらうようにしている。

△低学年育成事業で▽

低学年の時期から、親の思いや指導が伝わらない、親が子どもに負けているという家庭が増加して来ている。この時期に、親子の関係を確立しておくことが大切と考え、意識的に触れ合いの場を数多く作るようにここちがけている。

◇ 学校の始業式や終業式、長期休みの昼食づくりを保護者のローテーションで実施している。手作りの昼食というだけでなく、子どもたちとの触れ合いや子どもの動きを見てもらう良い機会ともなっている。

◇ 長期休業中など、保護者に「一日指導員」の体験をしてもらっている。子ども間のトラブルの対応、注意の仕方、ほめ方など、指導員との交流を通して学んでもらう場面が多くある。

◇ おやつづくりやスポーツ、折り紙など、親も参加しての活動を企画している。親子活動の企画によって、親相互のつながりを深め、お互いの情報交換の場ともなっている。

◇ その他、親子向け講座やイベントへも積極的に参加してもらえよう働きかけ、少しずつではあるが親の努力が見え始めている。

九七年度の四月～二月末の時点で、小学一年生一九家族の保護者が参加した記録をみると、延べ一八〇名にのぼっており、全く参加していない保護者はいないという成果があらわれてきている。

△講座・講習事業で▽

九七年度から親子による短期講座を意識的に企画するようにしている。パッチワーク、オカリナ、ユニット(折り紙)、切り絵、古代発見講座などがそれである。パッチワークに参加されたお母さんから、「下の子が生まれて、お姉ちゃんとかかわり方が分からなくなっていました。この講座に参加して、一緒に作業している内に、その答が分かった感じがしました」という話をもらった。

△イベント事業で▽

◇ 「子どもまつり」は、青少年会館として最大のイベントである。例年千名を超える参加者で盛り上がる。周辺地域の家族も含めて、一五～二〇の店舗が並ぶ。一店舗には、六名以上の子どもたちに最低一名の保護者がつくことを原則にしている。かかわった保護者から、自分の家の子を離れて見れたり、どんな友だちがいるか分かったり、道で会ったとき声がかげられるようになったなど、良かったという感想をもらった。

◇ 親子で作ろうく伝承遊びは、毎年テーマを変えて取り組んでいる。九七年度は、「お父さんやお母さんが子どもの頃」をテーマで実施した。紙芝居には住吉の鈴木さんと呼んだ。「べったん」や「ビーガン」「バイ」には、地区の父親が多数参加して、子どもたちに昔の腕を披露した。「おじゃみ」や「おはじき」「風車」では、お母さんの活躍が目立った。地区の保護者三六名に対して、周辺地域の保護者は一〇名であった。

◇ パードウォッチングでは、日ごろ参加してもらえない機会がなかったお母さんの参加があった。この時の子どもの喜びようは、言葉では表現できないほどであった。

◇ 音楽や人形劇の鑑賞会にも、多数の保護者が参加した。特に、ブラスバンド(地元高校)には、祖父母も含めての約一五〇名の参加があった。

◇ 冬山登山では、一年生のお母さんのがんばりが目についた。子どもは、登り始めて下山するまで、絶えず母親に話しかけ、手をつなぎ、笑顔が絶えず、喜びを全身で表していた。翌日、お母さんは全身に筋肉痛を訴えておられたようだが、子どもは全身に満たされた充実感を残していた。

また、同じ一年生で父親と参加した家庭では、翌日、

家族で同じ山に登られたそう。

わずか一日の共通体験ではあるが、これらの体験が家庭の話題にのぼり、親子の信頼関係を深めるきっかけになっていることを、子どもたちの変化で感じた時、青少年会館の職員は参加できなかった保護者への働きかけに意欲がわいてくるのである。

現在、休耕地を確保して、「親子菜園活動」の企画を進めている。この取り組みには、父親の参加を期待している。種蒔きから収穫まで、感動を共感できたらと考えている。

△保護者組織の支援を通して▽

地区には、「部落解放貝塚地区教育を守る会」(以下「守る会」と呼ぶ)という組織がある。組織率は対象家庭の九五%を超え、就学前から大学生の保護者までという大組織である。このパワーを生かせるかどうか、個々の家庭の教育力を高め、孤立家庭を支援し、地区としての教育力を向上させる鍵を握っている。

青少年会館では、守る会とタイアップして、「子育て学習会」や「保護者集会」「親子活動」などを企画・実施してきた。しかし、いずれも参加する層に偏りが見られ、参加して欲しいと期待する保護者層の参加へと拡大できない状況が続き、「しんどい家庭」ほど孤立化の傾向

が顕著になってきている。

そこで、守る会に働きかけ「教育班集会」を九七年一月に実現してもらった。班集会とは、守る会に入っている家庭が、近所の一〇家庭前後で一八班を作り、就学前から大学生までのいろんな層の保護者が班長の家に集まって、子育ての悩みや体験を交流しようとするものである。

第一回目の班集会には、登録している一六三世帯のうち七二世帯が参加した。班によって、それぞれに異なる話題となったが、

- ・「つい、クドクド怒ってしまう」などの反省談
 - ・「子どもとキャッチボールしている」などの交流
 - ・「中学生が携帯電話を…」などの危機意識
 - ・叱り方やほめ方などの悩み
 - ・基本的な生活習慣のチェックと実行確認
 - ・大学生を持つ親がかかわったか経験談 など
- 充実の時間となったようだ。参加者から、「今日のような機会をもっとたくさん持って欲しい」という声も多かったようだ。
- 学年別保護者集会を横の軸、班集会を縦の軸にして、保護者組織の充実を図る糸口が見えてきた。

六 地区に生じてきている新たな課題

地区では「しんどい」という場合、経済的なしんどさや学力的なしんどさが中心になってきた。この間の同和対策などの中で、経済的には一定の改善が見られる家庭が多くなってきている。しかし、その豊かさの結果として、子どもたちの服装や持ち物がぜいたくとも受け取れるような状況も見られるようになってきている。このような中産意識の子どもたちの中には、感性のしんどさが新たな課題となってきた。いじめる側や差別する側に回る子どもが増えてきている。

これは地区や家庭の重要な課題と考え、青少年会館としても具体的な対応策を模索している。

体験を通して

地区の高齢化が進み、老人との出会いを生かす事業を進めていく必要がある。高学年のボランティア活動として「老人向け住宅の清掃」を呼びかけところ、六年生を中心に一名の子どもたちが参加した。

地区では、「高齢者・障害者向けの生活支援型在宅給食サービス」が実施されている、この取り組みに子どもた

ちがさまざまな形で参加していくことも現在企画している。

今後、体験活動を通して感性に働きかけるようなボランティア活動を数多く企画していきたいと考えている。

保護者の生き方や思いを子どもたちへ

親の思いや生き方が子どもたちに伝わりにくくなってきている。青少年会館では、子どもたちの人権学習に、機会をとらえて親や青年の登場場面を数多く設定している。その中で、自らの体験や思いを語ってもらうようにしている。苦しかったことや悲しかったこと、悔しかったことに偏らず、生きることの素晴らしさや成し遂げたことの成就感など、子どもたちの展望につながる内容も含めて語ってもらうようにしている。そして、「ムラとしてこだわっていききたい中身」を確認して、支部と連携した教育運動へと発展させていきたい。

また、この人材が地区に限定されている傾向があるので、今後は、周辺地域の多様な保護者や青年の登場を実現できるように働きかけていきたいと考えている。

保育所との連携が一層重要

感性の課題を考える時、子ども相互が初めて出会う保

育所の取り組みが、極めて重要である。青少年会館と隣り合わせでありながら、形式的なつながりであったという反省に立ち、月一回の情報交換の場をつくったり、運営委員会の低学年育成事業専門部に参加してもらうなど、子育ての中身づくりに向け、より緊密な連携を図るようにしてきている。

地区の青年の動きに期待

子どもたちの感性の課題に問題意識を持った青年たちが、動き始めている。まず、サッカーやソフトボールクラブを、職場から直接駆けつけて指導してくれている。

また、青年と中学生が一緒に作業をしようと、町の通りに「創作提灯」づくりを企画した取り組みが続いている。木枠づくり、和紙はり、模様のデザイン、彩色などの作業を通して、青年と中学生が交流を深めている。二月二〇日～四月五日の長丁場の取り組みである。

一方、市内の中学生が取り組んで話題となっている「よさこいソーラン」踊り（高知のよさこい祭りと北海道のソーラン節をミックスさせ、鳴子を手に独創的な踊りとアップテンポな音楽が特徴）を、地区の中学生で組織して取り組もうと、青年が中心になり呼びかけ、参加した子どもたちを、練習風景の参観に連れて行くなどして、

自分たちの練習へとつないで取り組んでいる。これらの取り組みを通して、子どもたちと語り合える関係を作り、地域としての子育てに貢献していこうというのである。

地域を上げた教育運動が必要

九六年に、「しつけ」について、親向け二五問・子ども向け五〇問のアンケートを実施した。「親としてしつけているか」「子どもはできているか」という、両者からのアンケートである。

・ 地区として基本的な生活習慣をつけようと取り組みを強めてきた内容は、さすがに親子ともに九〇％に近い数値となっている。

・ 「電車内マナー」の項などでは、いつも車で移動し「電車に乗った経験がない」など、生活体験の貧弱さを見ることが出来る。

さらに、地域としての教育力の重要性を感じさせる、興味深い結果があった。

表1のグラフを見ると、保護者ががんばれば結果につながる内容。例えば、朝食を「用意」すれば、子どもは朝食を「食べている」と答える項では、親の回答と子どもの回答とがほぼ一致している。

表1 朝食を食べるようしつけているか 食べているか

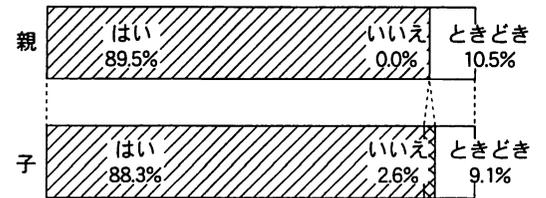
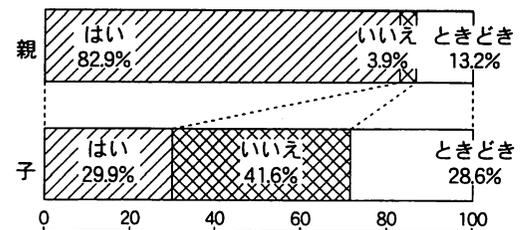


表2 空き缶をポイ捨てしないようしつけているか ポイ捨てをしていないか



しかし、表2を見ると、親は「しつけている」と答えている割合が八三％であるのに対して、子どもの方は、「できていない」と答えている割合が三〇％と大きな開きとなっている。この差こそが地域の教育力の現れである

といえよう。地域の大人たちの姿や友だちの姿から学ぶ内容ということである。つまり、大家族や一人の親のがんばりでは、どうしようもない教育課題があるということである。

このことから、地域の保護者との連携を一層深め、地域との「協同子育て」をめざす青少年会館のあり方が求められているといえよう。

おわりに

地域の教育力を復活させる原動力は、やはり人材にあるものと思われる。現在の学年別の保護者のつながりを

見ていても、それなりの成果を見ることが出来る学年には、子ども会（高友（大友））青年部の中心を担ってきた親たちがいる。リーダーの育成が、地域の教育力向上の鍵を握っているようだ。「去る者は日々にうとし」というが、高校や青年時代、親になって、青少年会館とのつながりをどのように作っていくかが問われている。例えば、講座の講師に登用した高校生や青年が、教育ボランティアにかかわるようになったり、青年部活動に結集するようになった事例はたくさんある。保護者においても同様のことがいえる。これからも、あらゆる機会をとらえて、いろんな層の人びとが入りする青少年会館でありたいと考えている。

これからの人権教育

新時代を拓くネットワーク

国際的な人権教育を学び、同和教育の新たな段階へむけた発展の指針を明らかにする。 97年7月刊

部落解放研究所編
A5判 278頁
2,400円＋税

これからの人権教育

新時代を拓くネットワーク

